

紬の川とたあまんの星

奄美市立屋仁小学校 六年 弓場 蒼大

むかし、ある村に一人の青年がいました。名前は吉之助といい、たあまん（田いも）を育てるのが仕事です。真面目で熱心に手入れをするので、吉之助の作るたあまんはあまくておいしいと、他の村からも人気でした。

この村では、カナという娘が織る大島紬も有名でした。カナはとても器用で、正確な織目と美しい絵がらを作るのが得意でした。

「おおい、今夜は年に一度の祭だぞう。けん上する物の準備はできてるかあ。」

村の人が、村中に声をかけて回ります。今年は吉之助がたあまんを、カナが紬を、神様にけん上する役目でした。神様は、二つの品物をたいそう気に入り、来年も同じ物を納めるよう二人に伝えました。

役目を終えた吉之助とカナは、そこで初めて、二人きりで話をしました。二人はとても気が合い、仕事が終わったら一しよに遊びに行くようになりました。しかし、あまりに楽しくて、遊ぶ時間はどんどん長くなり、いつしか仕事をさぼるようになってしまいました。

そして一年がたち、今年も祭の夜がやってきました。

するとなんということでしょう。神様にけん上できる品物がないのです。

吉之助が手入れをしないたあまんの実は、まずくて食べられないクワズイモになりました。カナが織らない紬は古くさく、ほつれた糸だらけになってしまいました。神様は二人の品を楽しみにしていたので、かんかんです。「働かず遊びほうけているとは、何事だ。ばつとしてお前たちを引きはなし、二度と会ってはいけないこととする。」

そう言うと、村の真ん中に大きな川を作り、北と南を分けて行き来できないようにしてしまったのです。

それからというものの、二人は仕事をするようにはなりませんが、何もかもうまくいきません。二人ともずっと悲しんでばかりなので、ようやくできたたあまんは前のようにあまくはならず、織り上がった反物はカナの涙でしみだらけなのでした。

二人の様子を見かねた村人たちが、なんとかできないものかとなやんでいると、村に一羽の美しいルリカケスが飛んできて、ガジュマルの木に止まりました。

「なんと美しいルリカケスだろう。これはきつと、神様の使いにちがいない。どうか神様に、手紙を届けてくれないだろうか。」

村の人々は、二人をゆるしてやってほしいという願い

を書いて、くちばしの前に差し出しました。するとルリカケスは、それをしっかりとくわえて、空へと飛び立ちました。

その夜のことです。吉之助のもとに、神様が現れて言いました。

「吉之助よ。それほどカナに会いたいのなら、畑仕事にせいを出しなさい。あの川の小石と同じくらい多く、私の心をとかすくらいあまいたあまんができたなら、二人を会わせてあげよう。」

カナのもとにも現れて言いました。

「カナよ、心をこめて紬を織りなさい。あの川と同じくらい長く、私の目を輝かせるくらい美しい反物を織ることができたなら、二人を会わせてあげよう。」

吉之助は、それから休む間もおしんで畑仕事に つとめました。カナは、せっせと反物を織り続けました。そして村人たちも、畑を手伝ったり、紬の糸をどろでそめたりと、二人を手伝ってくれました。

あつという間に一年は過ぎ、ついに祭の日がやってきました。北の社では吉之助が、南の社ではカナが、神様へのけん上物をささげました。へとへとになった二人とすばらしい品物を見て、神様は言いました。

「二人ともよくやった。約束どおり、これからは二人で会うことを許そう。」

神様は、手にした反物をするすると川に流しました。すると反物が大きく広がり、川をわたるための足場となりました。次に、たあまをころろ散りばめると、それは川べりを照らす明かりとなりました。それを見た吉之助とカナは、急いで川をわたり、おたがいひしとだき合いました。なみだを流して喜ぶ二人に、神様は言いました。

「ただし、この足場は晴れた日の夜にしか、わたることはできない。それ以外の間は村の人たちのため、しっかりと働いて、畑の手入れや紬の織り方を教えなさい。そうすれば、村はこれからもずっと栄えていくことだろう。」

それから二人は一生けん命、村のために働き続け、末永く幸せにくらしました。

何年も何年も月日が流れ、いつしか吉之助のたあまは空に上げられ星となり、カナの織った反物は天の川となりました。そして村では二人のたあまんと大島紬が受けつがれ、作りそこないのたあまもクワズイモとして、いつまでも実り続けたということです。